

『安眠が出来るかね』と言つて、手も握らないで歸つた。

警察醫は癒つても二百日間は危険だと言つて居られると義母が言つた。

僕は腹が立つて不可ない。

考へて見れば情けない淺猿しい自分に愛憎が盡きる。

小使ひらしい男の、あまのちやくのアクセントも聞き慣れた。

晝になると何處かの十五六の娘が、辨當を小使室へ毎日持つて來るらしい。

僕は義母の足音に聞耳を立てる。

『地震が揺つて死にでもしたら、何うする氣なのだ』僕はドナル。

水を矢鱈に扱み流す音が、僕の腦髓を痛く刺戟した。

午後になると馬の蹄の音がする。

厩から庭に引き出して、巡察と小使ひとが馬らしい會話をする。

呑氣そうに、

『此の馬はメンだね』とか『オンだね』とか言つてゐる。